

大阪 あんなとこ こんなとこ

『道修町』

大阪の難読地名のひとつに挙げられる道修町は、江戸時代より「くすりの町」として知られてきました。どうしてこの地域に製薬会社が多いのか興味を持ち、道修町について調べてみました。

地名の由来

道修町の地名の由来は、1 「摂津奇観」という書物に「道修町は近世まで道修谷という名存せり」とあるように、かつての谷の名前による 2 道修寺というお寺があり、そのお寺の名前にちなむ 3 北山道修きたやまみちしゅうという医師が住んでおり、その門前に薬種屋が多く集まるようになったことから 4 本願寺ほんがんじの教きょう如上人にょじょうにんがこの辺りに渡辺御堂というお寺（後に南御堂に移転）を建て、関係者である堂衆が多く住む様になり、その堂衆が道修になった 5 私塾が多くあり、修学修道の地であったことから 諸説ありますがどれも定かではないようです。

くすりの町

道修町がくすりの町として発展したのは、堺の豪商小西吉右衛門が二代將軍秀忠の命を受け、1635年に薬の原料となる薬種屋を開業した事が始まりとされています。その後、30年ほどの間に、道修町周辺で百件を超える薬種屋が店を構えました。1722年、八代將軍吉宗が大坂で病に倒れた折り、道修町から薬が献上されました。その薬により將軍は回復し、道修町の薬種中買仲間（薬の専売を許可された業者の団体）は、幕府から株仲間として公認され、和薬種改会所わやくしゅあらかいしよが設置されたという事です。道修町は全国の薬種流通の中心地として栄え、当時、日本に入ってくる薬は、いったん道修町に集まり、薬種の品質や量目をチェック、適正価格を定め全国の薬種問屋や薬種を調合する合薬屋あいくすりやへと販売されました。また、日本初の薬学専門学校（現在の薬科大学に相当する）が設置されたのも道修町だったそうです。

神農祭

少彦名神社すくなひなひなは、日本の薬祖神、少彦名命と古代中国最初の統治者、特に医薬を司った、神農氏しんののうを祀り、通称「神農さん」と呼ばれ親しまれています。昔から大阪の一年の祭は、正月のえびす祭で始まり、神農祭で終わるため「とめの祭」ともいわれ、毎年11月22日〜23日の祭礼には多くの参詣者でにぎわいます。



堺筋から見た道修町

掲載の記事・写真・イラスト等の全てのコンテンツ無断複写、転載を禁じます。

（株）ファッションビジネス・御堂筋新聞